高知学園大学・高知学園短期大学紀要　第56号（2026）：127-136

報告論文

短期大学における初年次教育の試みと課題
―幼児保育学科における実践報告―

伊達　諒[1]*，横田　侑弥[1]

要約：本研究の目的は，短期大学における初年次教育に該当する「ライティングスキル」の講義実践を報告し，文部科学省が行った初年次教育の調査内容に照らし合わせ，より効果的な初年次教育の在り方を明らかにすることである．その結果，①レポート・論文の書き方等の文章作法を身につけること，②学問や大学教育全般に対する動機づけ，③論理的思考や問題発見・解決能力の向上の各観点で対応が見られた．一方で，「プレゼンテーションやディスカッション等の口頭発表の技法」「学生生活における時間管理や学修習慣を身につけるための技法」「大学内の教育資源（図書館を含む）の活用」に関する内容は十分に取り組むことができていなかったことが顕在化した．今後の課題は，「ライティングスキル」で得られた成果を基礎として，「アカデミックスキルス」への発展的実践を行い，初年次教育の質的向上を図ることである．

キーワード：短期大学，初年次教育，保育者養成校，実践報告

Ⅰ．本研究の目的と背景

本研究の目的は，短期大学における初年次教育の実践を報告し，課題の検討を通して，より効果的な初年次教育の在り方を明らかにすることである．

初年次教育とは，高等学校から大学への円滑な移行を図り，大学での学問的・社会的な諸経験を“成功”させるべく，主として大学新入生を対象に作られた総合的教育プログラムを示している．それは，高等学校までに習得しておくべき基礎学力の補完を目的とする補習教育とは異なり，新入生に最初に提供されることが強く意識されたもので，1970年代にアメリカで始められ，国際的には「First Year Experience（初年次体験）」と呼ばれている．具体的内容としては，（大学における学習スキルも含めた）学問的・知的能力の発達，人間関係の確立と維持，アイデンティティの発達，キャリアと人生設計，肉体的・精神的健康の保持，人生観の確立など，大学における教育上の目標と学生の個人的目標の両者の実現を目指したものになっている[1)]．

文部科学省によると，初年次教育を導入している四年制大学は744校（98％），短期大学は248校（90％）である．四年制大学・短期大学における初年次教育は，「レポート・論文の書き方等の文章作法を身につけるためのプログラム」「プレゼンテーションやディスカッション等の口頭発表の技法を身につけるためのプログラム」「学問や大学教育全般に対する動機づけのためのプログラム」「論理的思考や問題発見・解決能力の向上の

[1] 高知学園短期大学　幼児保育学科　*Email: rdate@kochi-gu.ac.jp

表１．初年次教育の取り組み講義設計と到達目標の関係性（文部科学省を元に筆者作成）

項　目	四年制大学（学部別）	短期大学（学校別）
a　レポート・論文の書き方等の文章作法を身につけるためのプログラム	88.6%	76.7%
b　ノートの取り方に関するプログラム	57.4%	46.2%
c　プレゼンテーションやディスカッション等の口頭発表の技法を身につけるためのプログラム	82.3%	53.8%
d　学問や大学教育全般に対する動機づけのためのプログラム	81.6%	59.1%
e　論理的思考や問題発見・解決能力の向上のためのプログラム	69.0%	32.3%
f　将来の職業生活や進路選択に対する動機づけ・方向づけのためのプログラム	70.2%	66.7%
g　社会の構成員としての自覚・責任感・倫理観育成のためのプログラム	42.9%	32.3%
h　メンタルヘルス等，精神的・肉体的健康の保持に関するプログラム	35.5%	27.6%
i　学生生活における時間管理や学修習慣を身につけるためのプログラム	54.8%	44.8%
j　大学内の教育資源（図書館を含む）の活用方法を身につけるためのプログラム	78.6%	67.7%
k　自大学の歴史等を題材とした，自大学への帰属意識の向上に関するプログラム	45.2%	42.7%
l　ａ～ｋの選択肢以外の取組	3.5%	2.9%

ためのプログラム」「大学内の教育資源（図書館を含む）の活用方法を身につけるためのプログラム」などが挙げられている（表１）[2) 3)]．これらの項目は，各大学において取り組み状況が高く，今日における初年次教育の基本的内容と位置づけることができる．つまり，初年次教育とは，「高等学校教育」と「大学教育」をつなぐ基礎知識であり，大学においての位置づけは，「アカデミックスキル」と言い換えることもできるだろう．

一般的に四年制大学では，４年間の修業期間において，各教養教育に該当する科目と学部・学科の専攻に該当する専門科目を学修する科目開設が行われている．一方，短期大学では，２年間の修業期間において，各教養教育に該当する科目と学科の専攻に該当する専門科目を学修する科目開設が行われている．実際に，文部科学省の調査では，「プレゼンテーションやディスカッション等の口頭発表の技法を身につけるためのプログラム」「学問や大学教育全般に対する動機づけのためのプログラム」「論理的思考や問題発見・解決能力の向上のためのプログラム」の取り組み状況に差異が見られている状況である．このことから，短期大学における初年次教育は，四年制大学にて行われる初年次教育の焦点とする内容に相違がみられると考えられる．

高知学園短期大学幼児保育学科（以下，本学科）は，保育者養成校として，保育士の養成および幼稚園教諭の養成認可を受けている学科である．本学科では，2024（令和６）年度にカリキュラム改正を行い，教養教育科目と専門教育科目の教育内容について見直しを行い，教養教育科目における必須科目として，初年次教育に該当する科目（ライティングスキル）の新設を行った．2025（令和７）年度入学生より適用した「ライティングスキル」は，レポートの書き方・文献の調べ方といった，大学における「書く技術」の学修とサポートにおける位置づけが挙げられる．

また，本学科では，保育所実習および教育実習が資格・免許取得のためには必須であり，実習日誌・指導案等の書類を「書く」ことが学修内容には含められている．そのため，初年次教育は，より良い実習を目指すための基礎としても位置づけることができる．

本報告では，新設された初年次教育に該当する「ライティングスキル」の講義実践を報告し，文部科学省が行った初年次教育の調査内容に照らし合わせ，より効果的な初年次教育の在り方を明らかにすることを目的とする．

Ⅱ．研究・報告対象

実践報告の対象は，本学科１年生を対象として開講された教養教育科目「ライティングスキル」（令和７年度／前期開講／講義１単位／履修者57名）（以下，本講義）とした．本講義のシラバスと，文部科学省が行った初年次教育の調査内容に照らし合わせた．

Ⅲ．講義実践

１．講義設計

本講義は，大学生活の基礎的スキルとしての「文章を書く技術」を身につけることを目的に，①大学における講義の受け方，②講義課題として課されるレポートの書き方，③電子メールの書き方とマナーの３項目を中心に講義設計を行った（表２）．

講義の目的は，論理的で分かりやすい文章を書く力を養い，適切な情報収集と信頼性のある資料の活用方法を学ぶとともに，レポートやエッセイの基本フォーマットに従った執筆スキルを身につけ，大学で必要なメールやビジネス文書の作成方法を理解し，著作権や引用のルールを遵守しながら文献を適切に活用できるようになることを目指した．

到達目標は，①論理的かつ分かりやすい文章を作成できるようになる，②文章の構造を理解し，適切に組み立てることができる，③引用・参考文献の活用方法を身につける，④ビジネスメールや手紙の基本マナーと書き方を習得する，⑤批評的思考を持ち，文章を推敲・改善できるようになるとする５項目とした．

講義担当教員は，２名の教員による共同体制で実施し，１名が講義の全体進行を担い，もう１名が学生からの質問対応や，パソコン操作に関するサポートなどのティーチングアシスタント的役割を担うことで，よりきめ細かな指導体制を実現した．

２．講義計画

高知学園短期大学では，１単位あたりの必要な時間数はすべて45時間と定めており，45分の授業をもって１時間とし，90分（１時限）の講義が行われている[4)]．本講義は，「講義」（１単位）の科目として開設しているため，全８回にて講義計画を立案し，全講義終了後に定期試験を実施した（表３）．

表２．講義設計と到達目標

講義設計 ／ 到達目標	大学における講義の受け方	講義課題として示されるレポートの書き方	電子メールの書き方・マナー
①論理的かつ分かりやすい文章を作成できるようになる	○	◎	
②文章の構造を理解し，適切に組み立てることができる	○	○	○
③引用・参考文献の活用方法を身につける		◎	
④ビジネスメールや手紙の基本マナーと書き方を習得する	○		◎
⑤批評的思考を持ち，文章を推敲・改善できるようになる	◎	○	

（凡例）◎　特に関係性がある　　○　関係性がある

講義計画の前半は，大学における学修方法の基礎理解を目的とし，高等学校教育との構造的差異および，短期大学における講義の特性について講義を行った．さらに，ノートテイキング，質問技法，電子メールによるコミュニケーション等のアカデミックに必要なスキルの修得を図った．後半においては，小論文・レポート作成に資する文章作成技法の習得を目的とし，文献の検索方法および引用・参考文献の記載方法を学修したうえで，作文とレポートの構造的差異の具体例を示しながら，論理的な文章表現能力の向上を目指した．

講義の評価方法は，①講義における予習内容・所感及び質問にて評価を行う「リフレクションシート」(20%)，②講義で示される課題により評価を行う「講義課題」(30%)，③○×・記号選択等の客観式テスト及びレポートを含めた総合試験を「定期試験」(50%）として行った．

表3．講義計画

講義回数	講義内容	到達目標				
		①	②	③	④	⑤
1	オリエンテーション ライティングの基礎 講義の進め方／大学における読む力・考える力・書く力	○				○
2	メール・手紙の書き方 ビジネスメールの基本構成／敬語表現／依頼・謝罪・お礼の手紙		○		◎	○
3	ノートの取り方と情報整理 効果的なノートの取り方／講義や資料の要点を整理する方法	○	○			
4	情報収集と引用のルール 信頼できる情報源の探し方／引用・参考文献の活用／文献検索やデータベースの利用方法			◎		
5	文章の構造と論理的展開 序論・本論・結論の組み立て方，論理的なつながりを意識する	◎	◎			○
6	明確で簡潔な表現技法 冗長な表現を避ける／適切な語彙選択／推敲の重要性	○	○			◎
7	小論文・レポート執筆① テーマ設定・アウトライン作成・文章作成	◎	◎	○		○
8	小論文・レポート執筆② 推敲と改善	◎	◎	○	○	○
9	試験	○	○	○	○	○

（凡例）◎　特に関係性がある　　○　関係性がある

Ⅳ．文部科学省による調査項目

本報告では，文部科学省が実施した初年次教育の調査内容に照らし合わせ，本講義の講義計画に導入されている内容が，同調査内容とどのように対応が図られているかを検証した．その結果，①レポート・論文の書き方等の文章作法を身につけるためのプログラム，②プレゼンテーションやディスカッション等の口頭発表の技法を身につけるためのプログラム，③学問や大学教育全般に対する動機づけのためのプログラム，④論理的思考や問題発見・解決能力の向上のためのプログラム，⑤学生生活における時間管理や学修習慣を身につけるためのプログラム，⑥大学内の教育資源（図書館を含む）の活用方法を身につけるためのプログラムについて以下の点が明らかとなった．

１．レポート・論文の書き方等の文章作法を身につけるためのプログラム

本講義におけるレポート・論文の書き方等の文章作法を身につけるためのプログラムでは，第４回「情報収集と引用のルール」，第５回「文章の構造と論理的展開」，第６回「明確で簡潔な表現技法」，第７・８回「小論文・レポート執筆」に該当する．

第４回「情報収集と引用のルール」では，レポート課題において用いられる引用方法と参考文献の扱いの違いについて講義を行った．レポート作成の経験が少ない学生は，インターネット上の文章や既存のレポートを無自覚のまま引用してしまう可能性がある．そのため，本講義では，剽窃の定義とその問題点について説明を行った．併せて，レポートにおいて適切とされる情報源と不適切とされる情報源の違いについて，具体例を挙げながら整理した．そのうえで，情報の信頼性を確保するためには出典を明確にすることが不可欠であることを伝えた．さらに，レポートにおける引用および参考文献の記載方法について講義し，学生にパソコンを持参してもらい，情報・文献検索の演習を実施した．

第５回「文章の構造と論理的展開」・第６回「明確で簡潔な表現技法」では，文章の構造として「序論」「本論」「結論」の位置づけを確認し，主語・述語の関係性および「話し言葉」と「書き言葉」の違いについて講義を行った．また，論理的文章における推敲の必要性を説明した．これらの内容については講義後に，例文を提示し，「話し言葉」を「書き言葉」へと言い換えることや，文章における「主語」「述語」を確認する演習を取り入れた．

第７・８回「小論文・レポート執筆」では，レポートの表紙の作成方法およびレポートの評価におけるルーブリックの説明を行った．学生は，レポートを実際に作成することを行い，教員はパソコン操作，文章作成ソフトの使用方法および文章表現などについて個別に学生対応を行った．また，本講義の目的は，ライティングスキルの修得を掲げているため，講義外においても提出予定のレポートを添削する取り組みを行った．多くの学生が，担当教員の研究室を訪れ，自ら作成したレポートの添削を受けていた．上記の実践を踏まえ，本講義におけるレポート・論文の書き方等の文章作法は，文部科学省が実施した初年次教育の調査内容におけるレポート・論文の書き方等の文章作法を身につけるためのプログラムに対応していると考えられる．

本講義は，短期大学に入学した学生が１年次前期に履修する科目であり，入学初期に文章作法を学修することで，高等学校との学修形態の相違を理解する契機となっている．さらに，他科目で課されるレポート課題にも対応可能となることから，学際的な学修基盤を形成することにもつながっている．

また，文章作法の学修は，保育実習における実践内容の整理および保育実践の言語化能力の向上に寄与すると考えられる．実習日誌への記述では，単なる事実の羅列にとどまらず，引用・参考文献を根拠として示すことと同様に，内容を裏付けする姿勢が見られるようになり，学術的な省察へと発展する可能性が示唆される．

このように，レポート・論文の書き方等の文章

作成を身につけるためのプログラムは，短期大学におけるアカデミックスキルの中核的要素として位置づけられていることが確認できた．これにより，保育者養成における初年次教育では，文章作法をアカデミックスキルとして体系的に扱うことにより，学生の実習日誌作成に対する不安の軽減に資する可能性についても示唆された．

２．プレゼンテーションやディスカッション等の口頭発表の技法を身につけるためのプログラム

本講義におけるプレゼンテーションやディスカッション等の口頭発表の技法を身につけるためのプログラムは，講義計画に含んでいなかった．本講義は「ライティングスキル」として，文章作成に焦点を当てた科目として位置づけていた．そのため，プレゼンテーション等の口頭発表による技法を学修対象とはしておらず，これらに関する講義は実施していない．

短期大学における初年次教育では，プレゼンテーションやディスカッション等の口頭発表の技法を身につけるためのプログラムの取り組み状況は，四年制大学と比較して低い傾向にある．このことは，短期大学における初年次教育の課題の一つとして位置づけられる．しかし一方で，短期大学では，このプログラムよりも他のプログラムを優先して取り組む必要性が高いことから，初年次教育の中で相対的に重視されていない可能性も考えられる．したがって，今後は，他の科目との相互的な関連を踏まえ，効果的なプレゼンテーション等の口頭発表の技法を学修する機会を体系的に確保することが課題として示唆された．

また，短期大学における初年次教育の中で，プレゼンテーション等の口頭発表技法の位置づけが十分に明確化されていない現状が考えられる．どのような内容がプレゼンテーション等の口頭発表技法に含まれるものであるのか，導入の在り方について検討を進める必要がある．

３．学問や大学教育全般に対する動機づけのためのプログラム

本講義における学問や大学教育全般に対する動機づけのためのプログラムでは，第１回「ライティングの基礎」，第２回「メール・手紙の書き方」，第３回「ノートの取り方と情報収集」に位置づけられる．

第１回「ライティングの基礎」では，大学教育全般に共通する能力にあたる「文章を読む」「文章を書く」「論理的に考える」とする三点に焦点を当てて講義を行った．文章を書くためには，まず課されたテーマに対して，自分自身がどのような考えを持っているのかを自覚する必要がある．さらに，その考えを支える根拠をどのように提示することができるのかが重要となる．これらを踏まえて，批判的思考の視点からライティングに取り組む姿勢について講義を行った．

第２回「メール・手紙の書き方」では，電子メールの基本的な使用方法および書き方に関する講義を行った．近年の学生は，日常的なコミュニケーション手段として電子メールを使用する機会が少なく，主にSNSによるやり取りが中心となっている．そのため，電子メールの作法を一般教養の一部として位置づけた．講義後には，学生自身のパソコンを使用してメールを作成し，送信する演習を取り入れたことで，実践的なスキルの習得を図った．

第３回「ノートの取り方と情報収集」では，大学の講義におけるノートの取り方および講義の要点を整理する方法について講義を行った．特にノートの取り方に関連して，大学における講義の受け方そのものを理解できるように配慮した．大学講義における教科書の使い方は，高等学校における教科書の使い方と異なるケースも見られるため，違いを意識してもらいながら，学修姿勢の転換を図った．上記の実践を踏まえ，本講義における学問や大学教育全般に対する動機づけは，文部科学省が実施した初年次教育の調査内容における学問や大学教育全般に対する動機づけのためのプログラムに対応していると考えられる．

一方で，本講義では「学問」そのものに関する内容を直接的に扱っていなかったため，この点は今後の課題として検討が必要である．この課題が生じた要因の一つとして，科目名の制約が挙げられる．本講義の科目名が「ライティングスキル」であることから，「学問」や大学教育全般に関わる「アカデミックスキル全体」を包括的に扱うことは困難であった．すなわち，本講義では「文章を書くこと」に焦点を置いたため，大学教育全般における講義内容へと講義範囲を拡張することは，科目目的の曖昧化を招き，結果として学生の理解に混乱を生じさせる可能性があったためである．講義では，アカデミックスキル全体を包括的に扱う必要性がある場合，その内容に想定することができる科目名にすることが求められる．

４．論理的思考や問題発見・解決能力の向上のためのプログラム

本講義における論理的思考や問題発見・解決能力の向上のためのプログラムでは，第４回「情報収集と引用のルール」，第７・８回「小論文・レポート執筆」に位置づけられる．

第４回「情報収集と引用のルール」では，「情報収集の種類」「信頼できる情報収集の方法」「引用・参考文献の活用」「文献検索やデータベースの利用方法」を中心に講義を行った．論理的で説得力のある主張を組み立て，根拠を示していくためには，信頼できる情報を収集していく必要がある．正しい情報をもとに根拠を示していくために，主に「文献」「学術論文」「インターネット」を情報収集の種類として例を挙げながら情報の信頼性についても考える機会とした．

第７・８回「小論文・レポート執筆」では，レポート作成の基礎として，「表紙の作成方法」および「本文の構成方法」に関する講義を実施した．受講者にはパソコンを持参させ，文章作成ソフトを用いて，表紙および本文を実際に作成する演習を行った．

また，レポート課題における評価には，ルーブリック評価を提示し，「課題の理解」「論理的思考」「文章表現」「提出期限」「メールの書き方」の５つの視点を細分化し，講義課題のポイントと５段階の評価の視点を提示した．

上記の実践を踏まえると，本講義における論理的思考や問題発見・解決能力の向上は，文部科学省が実施した初年次教育の調査内容における論理的思考や問題発見・解決能力の向上のためのプログラムに対応していると考えられる．しかし，短期大学において，この項目の取り組み状況は低いため，本項目に限定した取り組みに特化する講義設定ではなく，他の調査項目とも併せて，講義設計を行うことの検討が求められていると考えられる．

５．学生生活における時間管理や学修習慣を身につけるためのプログラム

本講義では，学生生活における時間管理や学修習慣を身につけるためのプログラムを講義計画に含めていなかった．

本講義は，プレゼンテーション等の口頭発表においても触れていたように，文章作成に焦点を当てた科目として位置づけていた．そのため，学生自身の時間管理や学修習慣に関する内容を直接的に扱う講義は設定していなかった．しかし，本講義で予習・復習内容を明示することにより，講義時間外における学修習慣の確立を促す取り組みを行った．

文部科学省による初年次教育の調査結果によれば，学生生活における時間管理や学修習慣を身につけるためのプログラムに取り組んでいる四年制大学および短期大学は，全体の約５割程度にとどまっている．大学生活における学修では，課題の提出期限や受講スケジュール管理（出欠状況の把握等）に代表されるように，時間管理を行うこと，および学修習慣を身につけることが重要である．複数の課題を同時に遂行する必要がある大学生活においては，自己管理能力が学修の基盤を支える要素の一つであると考えられる．とりわけ，講義における予習・復習は，文部科学省が示す「時間外学修」に位置づけられている．講義担当

者は，その取り組み状況を把握することは容易ではない．したがって，時間外学修への取り組みをいかに可視化し，それを学修意欲の向上へとつなげるかが，初年次教育における重要な課題として示唆される．

しかし，学生生活の在り方は，初年次教育の内容として欠かすことのできない重要な要素である．今後は，初年次教育に該当する講義にて取り扱うのか，あるいは講義開始前のオリエンテーション等のガイダンスで取り扱うのか，各大学において適切な時期と方法を検討する必要がある．さらに，ICTを活用して時間管理や学修習慣を可視化・確認できるようにすることで，学生がより主体的かつ，自律的に大学生活を送ることができるようになることが期待される．

6．大学内の教育資源（図書館を含む）の活用方法を身につけるためのプログラム

本講義では，大学内の教育資源（図書館を含む）の活用方法を身につけるためのプログラムに関して，第２回「メール・手紙の書き方」において取り扱った．第２回「メール・手紙の書き方」では，大学における教育システムの一つである「Microsoft Office 365」および「Microsoft 365 Apps」を用いて，電子メールの操作方法およびメッセージの書き方について講義を行った．メッセージの書き方に関する講義では，基本構成となる「件名」「宛先」「挨拶文」「用件」「締めの挨拶文」「署名」の６項目を提示し，具体的な文例を示した．

講義後には，実際にメールを作成・送信する演習課題を実施した．課題内容は，「講義担当教員に課題の提出期限を確認するメールを作成する」というものとした．学生は，宛先に受講者全員に届くメーリングリストのメールアドレスを入力し，CC欄に自分自身のアドレスを追加することで，送信内容を確認できるようにした．

また，受講者全員をメーリングリストとして設定したことで，他の学生のメール内容も共有され，互いの文面を比較・改善する機会ともなった．一方，今年度の講義では，大学内の教育資源の一つである図書館の活用については講義設計に入れていなかったため，実施することができなかった．

上記の実践を踏まえると，本講義における大学内の教育資源（図書館を含む）の活用方法を身につけるためのプログラムに直接的に対応しているとは言い難い．大学内の教育資源の位置づけは，多岐にわたり，四年制大学や短期大学の初年次教育として，統一的に位置づけることは容易ではない．しかし，その多岐にわたるが故に，四年制大学および短期大学においては，教育資源の活用に関する取り組み状況が比較的高い傾向にあると考えられる．

Ⅴ．今後の課題

本研究は，短期大学における初年次教育の実践報告を行い，文部科学省が実施した初年次教育の調査内容に照らし合わせた．また，課題の検討を通して，より効果的な初年次教育の在り方を明らかにしてきた．

文部科学省による初年次教育の調査結果では，①レポート・論文の書き方等の文章作法を身につけるためのプログラム，②ノートの取り方に関するプログラム，③プレゼンテーションやディスカッション等の口頭発表の技法を身につけるためのプログラム，④学問や大学教育全般に対する動機づけのためのプログラム，⑤論理的思考や問題発見・解決能力の向上のためのプログラム，⑥将来の職業生活や進路選択に対する動機づけ・方向づけのためのプログラム，⑦学生生活における時間管理や学修習慣を身につけるためのプログラム，⑧大学内の教育資源（図書館を含む）の活用方法を身につけるためのプログラムが，四年制大学および短期大学において，初年次教育の内容として取り組まれていた．

本講義を文部科学省が実施した初年次教育の調査項目に照らし合わせると，本講義は，①，④，⑤の各観点において，一定の対応を示していた．一方で，「ライティングスキル」に焦点を限定し

た初年次教育であったため，他の初年次教育プログラムを包括的に取り入れることができなかった点が課題として顕在化した．

そこで本学科では，2024（令和６）年度のカリキュラム改正に引き続き，2025（令和７）年度にカリキュラム改正を行った．現行の初年次教育に該当する「ライティングスキル」から，よりアカデミックな内容へと展開を図るため，科目名を「アカデミックスキルス」として2026（令和８）年度入学生より実施予定である．

本研究で明らかになった課題を踏まえ，「アカデミックスキルス」では，到達目標に①，④，⑤，⑦，⑧の内容を含めることが求められる．

今後の課題は，「ライティングスキル」で得られた成果を基礎として，「アカデミックスキルス」への発展的実践を行い，初年次教育の質的向上を図ることである．

注

１）中央教育審議会（2025）「用語解説」（https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/__icsFiles/afieldfile/2008/12/26/1217067_002.pdf，2025. 10. 12）．

２）文部科学省「令和４年度の大学における教育内容等の改革状況について（概要）」（https://www.mext.go.jp/content/20241011-mxt_daigakuc01-000038093_1.pdf，2025. 10. 12）．

３）文部科学省「令和４年度における短期大学教育の改善等の状況に関する調査」（https://www.mext.go.jp/content/20210420-mxt_daigakc01-100001509_2.pdf，2025. 10. 25）．

４）高知学園短期大学（2025）『令和７年度　学生生活と履修の手引き』

参考文献

廣瀬晶久・木村浩巳・小熊みどり・三坂育正（2024）「サステナビリティ学科の「アカデミックスキル入門」における実践報告」『武蔵野大学サステナビリティ研究所紀要』１，91-102.

廣瀬清英・林研・佐々木亮平・香川由美・三浦康宏・藤澤美穂（2024）「アカデミックスキル習得のための多職種連携のためのアカデミックリテラシー（2024年版）」『岩手医科大学教養教育研究年報』59，59-67.

直江学美・森永秀典・三好伸子・佐藤静恵・島倉晴信・福田美月（2024）「（実践報告）こども学科における初年次教育の取り組み―保幼小連携に着目して―」『金沢星稜大学人間科学研究』18，1，13-22.

田岡昌大（2024）「初年次教育の実施上の課題について―大阪青山大学子ども教育学科の実践を中心として―」『大阪青山大学紀要』15・16，19-29.

渡邊淳子（2022）「全学必修科目「アカデミックスキルⅠ，Ⅱ，Ⅲ」実施報告」『熊本保健科学大学研究誌（熊本保健科学大学）』19，155-162.

受付日：令和７年11月５日
受理日：令和７年12月15日

Bulletin of Kochi Gakuen University / Kochi Gakuen College, No. 56（2026） pp. 127-136

Report Paper

Attempts and Challenges in First Year Experience at Junior Colleges —A Practical Report Focusing on Childcare Worker Training—

Ryo DATE[1]*, Yuya YOKOTA[1]

Abstract: The purpose of this study is to report on the implementation of a "Writing Skills" course, which corresponds to first-year education at junior colleges, and to identify more effective approaches to first-year education by comparing its content and outcomes with the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology's (MEXT) survey on first-year education. The course was designed to help students acquire fundamental academic abilities by focusing on the development of written communication and logical expressions. The analysis revealed that the course effectively addressed three main areas: (1) acquisition of writing techniques, including report and paper composition, (2) fostering motivation for academic studies and higher education, and (3) improvement of logical thinking and problem-solving abilities.

However, the findings also indicated areas requiring further enhancement, such as (1) oral presentation and discussion skills, (2) strategies for managing time and developing effective study habits in student life, and (3) the utilization of educational resources within the university, including libraries and digital tools. These aspects are recognized as essential components of comprehensive first-year education as outlined in MEXT's framework.

Overall, the results suggest that while the "Writing Skills" course contributed to improving students' writing competence and learning motivation, it remained limited in scope. Future challenges include expanding the curriculum beyond writing-centered instruction and developing it into an "Academic Skills" program that systematically integrates communication, learning management, and information literacy skills. Through such enhancements, the quality and effectiveness of first-year education in junior colleges can be further improved, to support the smooth transition of students into higher education and lifelong learning.

Key Words: junior college, first-year experience, Childcare Worker Training School, practical report

[1] Kochi Gakuen College, Department of Early Childhood Education and Care, *Email: rdate@kochi-gu.ac.jp